

現場のリアリティあふれる事例で 医療福祉現場の倫理を学ぶ

【評者】中島紀恵子 日本看護協会看護教育研究センター

菊井和子・大林雅之・山口三重子・斎藤信也(編)

ケースで学ぶ医療福祉の倫理

ケースで学ぶ 医療福祉の倫理

(編集) 菊井和子 大林雅之 山口三重子 斎藤信也



看護・介護・医療・福祉……
「医療福祉」の現場で

遭遇するさまざまなトラブルやディレンマにひとりでは解決しない！
問題解決について考える際の手助けとして、
臨床現場で働く方々に向けたケアの現場のナキストとして、
医療福祉にかかわるすべての人の必読書。

医学書院

定価 2,310 円(本体 2,200 + 税 5%)
医学書院 (Tel.03-3817-5657)

市民ニーズの声が聴こえているようなタイトルである。ここ 20 年
足らずの間に、「介護」が誰でも使う言葉になったのに比べれば、「医
療福祉」の共通理解は“いま一歩”のところまで低迷しているように思
える。

医療プラス福祉という意味での「医療・福祉」ではなく、「医療的
ニーズに応えると同時に生活面でのケアを提供する(序文)」のが「医
療福祉」なのだという強いマインドをもって本書は書かれた。そこに
込められた著者のメッセージは、医療福祉ケア/サービスを必要とす
る多くの高齢者、障害者、難病患者とその家族、ならびにその場面に
携わる、職種を異にする大勢の関係者がそれぞれ「はたして誰の益な
のか」と思い悩み、揺れ動く思いの間で、倫理的ジレンマを抱えてし
まう問題に対し、読者もチームの 1 人になったつもりで学習に参加
してほしいというものであろう。

本書と対話しながら読み進めることを優先するなら、第 2 部の事
例編を先に読むほうがよいかもしれない。事例検討はチーム学習その
ものである。そしてチーム学習は「対話」で始まる。また、対話が本
当の意味での「共同思考」をうながす。対話によって、ケア提供側、
患者、家族はそれぞれに「私」を語る自由と寛容さを手にすることが
でき、その流れのなかでいま、その人にとって本当に助け合って生き
ることの意味を発見できる。それは、共同思考をともにしてきた者た
ちの共同行動から起きた発見であるから身についた記憶になる。

本書は、『訪問看護と介護』に連載された「事例で考える医療福祉
倫理」を第 2 部の事例編(筆者の理解でいえばチーム学習編)とし、
第 1 部に手引きとしての理論編、第 3 部に資料編を新しく書き下ろ
してつけ加えた。

看護倫理教育のあり方として、専門的実践能力や倫理的・法的実践
に関しての“基準”となる理論と、ルールを十分に活用できる一定の
スキルを身につけられるリアリティのある学習の訓練を欠かせないとい
う認識を新たにした。事例検討では、患者、家族、異なる職種を含め
たシナリオ作りと演じ手を用意した模擬学習でないと対話はやせてい
く。諸問題をナラティブに語ることと聴くことのスキルが未熟なところ
では、ケア提供者側の倫理的葛藤の所在はクリアにならない。そうな
るとケア提供側は、できる限り相手の益をめざすために、相手の気持ち、
意思、存在そのものを人間として尊重するというケアの世界に普通に
あることに熱中できないだろう。このような方法に関して本書との対
話を楽しみながら読み進むなかで、医療福祉現場のケアリングを適切
にアレンジするには社会的視点に立った正義(公平さ)の扱いにも関心
を向ける必要があると思った。これを欠くと医療福祉活動における倫
理的の質を点検できない。また、介護支援センターなどの地域保健現
場、医療福祉現場における「連携」の倫理的意味は深まらないだろう。
こんなふうに考えさせられる、ヒント満載の本に久々に出会えた。